

# 唯識觀の契機

—曾我量深先生の唯識学への感銘—

山田亮賢

一

曾我先生が「唯識觀の契機」という講題の下に唯識学における末那識に関して一ヶ年間講義を続けられたその頃の感銘は四十余年を経た今日も忘れ難いものがある。私が大谷大学学部三回生、最終学年の時であった。昭和四年四月から翌五年三月の間のことである。それまでに私は多少の仏教学の知識はあったにしても、問題を問題として突っ込んでゆくということはなかった。私にとっては漫然と仏教の知識の習得に過ぎなかった。それが「唯識觀の契機」を毎週学ぶことによって、仏教の根本問題に触れることが出来たのである。唯識学の講義を聞いていることが、単に唯識宗義の習得ということを超えて、真の宗教の根本、仏教全体に貫通する根源の問題であることに驚異の眼を瞪らしめられ、私の生涯における宗教的開眼とも言い得る重大な縁となったのである。大学の講義であったから、他にも多くの学友が居り、その学友がどのような領解をしたかは知り得ないが、私自身にとっては、この深い縁が仏教学を学ぶ直接の機縁となったのである。

想い起せば、その年、曾我先生は講義と並行して、真諦訳『撰大乘論』の講読を受け持たれた。また真宗学では『教行信証』「信卷」を講ぜられた。その何れにも受講する幸運に恵まれたのである。今にして自己の過去を顧みて今生における最も良き時代であったと思うのである。曾我先生の「略年譜」に出ているように、大正十四年四月、先生が大

谷大学教授に就任せられ、昭和五年三月辞任せられたのであるから、私の在学時代全部が先生の御在任の時代に当る。勿論、予科から学部へ入学した頃は先生に親しく教えを受ける縁が無かった。自分にそれだけの積極的な意欲が無かったのである。ところが学部二回生の時、学園に不幸な風が吹きまわって、金子大栄先生の御講義が中絶され、先生は学園を去られる悲運に際会した。その当時のことは今も忘れ得ない悲しみであるが、曾我先生は止って仏教学を背負って下さった。そのような事情もあったため、私は曾我先生の唯識学に参加することが出来た。求める心は弱少であつたが、与えられたものが実に大きかつた。最初から「唯識観一般」を学んだ。『成唯識論』を繙いたこともなく、阿頼耶識の深い意味を教えられた。到底追隨することが出来ないままに心牽かれ、仏教に関して多くを知らない私は仏教学とはかかるものであるかと素直に聞くことが出来た。唯識学はただ専門分野としてのそれではなく、私にとっては、そこから全仏教学の視野が展開されて行つた。曾我先生の御講義は難解であつて理解出来ないという声も当初からよく聞かされた。また逆に曾我先生の教えのみを肯定して、その他を否定する傾向の者も見受けられた。私はその当初から自己の能力とすることを考えさせられた。曾我先生の深い宗教的体験と思索によつて表現されたものが、僅かな知識と経験の乏しい、無能な自己に直ちに全部が理解出来る筈はない。その一分でも何かを受けとられる。可成り努力しても追隨することの出来ない限界を意識しつつ、しかも難解であつても絶えず感激があり、繰り返し感銘をうけて、そこから自己を開拓することが正しいと信じていた。単に解つたと言ひ得るようなものでない。解らないとも言ひ切れない。解らないから聞くとも言えるが、解るものがあるから難解であつても魅せられて聞く。問題は仏教の眞実を聞く根本の姿勢にあるのである。そのことを学生時代から先生の教えを聞く中に自然に知らしめられた。

唯識学と言へば、当時、宇井伯寿博士が、『印度哲学研究』を岩波書店から次々に刊行せられた。学生として私達はずねに注意をして所謂新しい原典研究にも眼をさらした。また哲学の面では西田幾多郎博士が『働らくものから見るものへ』等新たな哲学の領野を開拓して行かれた頃である。仏教学界、哲学思想界の種々なる研究の刺戟を受け

つつも、曾我先生の唯識学を聞き続けていると極めて独特なものがあり、如何なる仏教学者の研究とも異つたものがあつた。唯識学が宗教として生々としている。所謂解説でなく、唯識学を身証しての声、体験の流露であることを痛感せしめられた。そして唯識学の中から広く且つ深い仏教の課題が見出されて来た。所謂結論を急ぐのでなく、限り無く問いが生じて来たのである。そのような問い方こそ、止まることのない求道であり、聞法であることが自然に首肯されたのである。

## 二一

「唯識観の契機」を講ぜられた頃の曾我先生は大学での講義の最も力の籠つたものであつたように思われる。先生の九十七年の御生涯の中でもこのような唯識学の御講義は二度と無かつたのではなからうかと思われる。時には二時間の定められた講義が五分か十分もかからずに終つたこともある。「私は頭が悪いからよくわかりません」と『成唯識論』を閉ぢて教壇から降りて行かれたことも一再ならずあつた。またどこから湧き出でるかわからない熱の籠つた御言葉が滞ることなく、次から次へと流れ出て、時間が過ぎてしまい、次の他の授業時間に喰ひ込んでしまうようなことも屢々経験したことであつた。常識的な講義の準備というようなことをされては思えなかつた。一回の講義に全力が傾倒されて、所謂体系的なものでなく、直観的な鋭いものがつねにひらめいていて、それだけにいつも私達の概念的な考えを強く打ち砕いて下さつた。従つて講義の準備は逆に先生の内面に並々ならぬものがあつたのであるかろうかと想像されるのである。後に或る座談会の席で耳にしたことであるが、大学の講義に出られる朝、「朝食の箸が取れないことが時々あつた」と言われて驚ろかされたことである。先生にしてそのようなことがあつたのか。しかし先生が仏教の問題を、唯識学の課題をどこまでも深く日に日に追究されて行かれたその頃の学究生活がそこから窺われるのである。先生の挽みない内面的な行修が、更に探究の苦悶が続けられていたことが納得出来るのである。

その後、あの大きな転機とも言われている還暦記念の御講演「親鸞の仏教史観」は、私には先生がそれ以前の仏教探究のこのような苦闘を続けられた結果、新たに開けた境地の開頭であったと推察出来るのである。『親鸞の仏教史観』後の先生の自在の教化は全く菩薩道の八地の天地に出でられたものとも言つてよいと思う。その頃の先生が私へ下さった私信の中に「私は従来自己の思想の散乱に久しく苦しみました、今は一切本願内観の中心自覚に統一せられて、一切は無為自然の境であることを知るを得るにいたしました。遊煩惱林現神通であります。」という御言葉があり、この御言葉に宗教的な真の歓びと、深い体験からにじみ出た任運無功用の明るい天地が開けたことが述べられていることを知らされるのである。そしてその後の三十七年間の所謂御老境の自行化他の大活躍、獅子奮迅の新たな御生活がはじまったと見てよいと思う。しかしそれ故になお私は先生が「従来自己の思想の散乱に久しく苦しみました。」と言われた因位の思想的苦悶が尊くありがたく偲ばれるのである。それは「唯識観の契機」を講ぜられた頃のあの仏教学の追求の鋭さから特に懐かしめられるのである。勿論先生にあっては唯識学にあつても、親鸞教学と相応したものであることは言うまでもない。所謂、学問的には独断と批判する者もあろうが、そうした皮相的な批判とは全く立場を異にしての仏教本来の主體的、内面的な自己追求の方法を一貫して行かれたのである。私にとっては、唯識学の講義を聞いた時も『教行信証』の講義を聞いている時も、何ら異った感じを受けなかった。教理教相の面の相違はあつても、先生が追求して居られる一つの真実から流れ出ているために、何等不自然なものが無かった。仏教的人格というものがそこに深く感ぜられた。特に唯識学、広く言えば仏教学であるが、そこに見られる特殊な用語が、単に概念的な用い方でなく、先生には全く消化され切つて、先生自身に生きた用語として、真宗学の場合にも生々として自由に用いられていた。私にとっては親しみ切れない唯識用語、仏教学の難解な用語がこのように生々と自由に

使っていられることには驚嘆せしめられたのである。そして及び難さを痛感せしめられながらも、これこそ真実に仏教を体験する正しいありかたであると知らしめられたのである。

このことから学生当時から気付かしめられたことは、先生の仏教学の深さと広さである。直接的には唯識学の問題を追求して行かれる中に、龍樹の教学とか、華嚴一乗の教学とか、起信論の思想の特質とかが、私などには戸惑いさせられる程出て来て、しかも概念的にしか考えていなかった所謂知識的なものでなく、その内面的中核的な精神と特徴とを端的に打ち出して下さったことである。晦渋な説明ではなく、快刀乱麻を断つという風であった。そこから感ぜさせられたことは、先生の因位の御修行は如何なるものであったのか。この世において如何なる機縁でこのような広い視野と、深い探究が始まったのか、私が教えを受けた以前にもどれ程の御修行があったのか。多くを知らない私としても、『地上の救主』や『救済と自証』等の名著は既に知り、一応読んでいた。清沢満之先生の門下で学ばれていたことも知っていた。しかしなほ先生の背景の巨大なものがどんなものであったのか依然として不可解であった。今も先生の今生における過去の詳しいことは知り得ていないのであるが、私の学生時代からの疑問は必ずしも解けていない。ただ一つ思い当ることは、先生の背景は単に此の世のそれのみではなく、過去世、そこに幾世かけての御修行があったのであろうということである。それは先生御自身の意識をも超えたものであり、曠劫の修因ということが、現実の人としての先生にこそ適切に言い得ると思う。

#### 四

「唯識観の契機」の講題を知った時、それが何を意味するのか私には見当がつかなかった。珍らしい題であり、それだけで何か根本的な問題が提起されていたことは感ぜられ、特に関心が持たれたことを記憶している。私は先生の御言葉を全部書き取るというようなことはしなかった。感動してペンを取ることを忘れていたことが多かった。講義

の言葉を覚えるというようなことはしなかった。従って「唯識観の契機」の御講義で強く感銘を受けた内容のメモのみが残っている。しかし、このメモは私が若い時代に宗教的な根本問題に触れた重要な記録とも言える。その中に「無自覚を自覚ならしめるものは末那識である」とか「末那識は衆生の罪惡意識である」とか幾度び掘り下げても尽きない甚深の意味を持つ問題を投げ与えられている。末那識が限り無く深い我執の根源であり、また煩惱の根であることは言うまでもないが、通常自意識は上らない迷妄の根源をあらゆる角度から掘り下げて下さったのである。『成唯識論』は法相教学において極めて詳細に法相の分析が行われているが、先生は末那識が宗教的自覚の根本問題を説いていることに特に鋭い着眼をされて、先生の宗教的苦悶と体験を通して我執の深さを説かれたのである。表面的には『成唯識論』を読んでも素通りしてしまうようなことを、私など単に知識に終ってしまうようなことを、思いもかけぬ内面に問題を発見されて、宗教的な根本問題として教示して下さいました。私にとっては人間性の本質の問題、宗教的自覚の問題はこの「唯識観の契機」即ち末那識の問題から、はじめて新たな自己の問題となったのである。それ故に幾年月経っても、私の仏教学の根本問題はここから離れ得ぬものがある。嘗て、「唯識教学に於ける末那識の特性」〔大谷学報〕二二巻一号)や「唯識教学に於ける染汚観」〔大谷大学研究年報〕第三輯)等に発表した貧しい論文は、実は全くこの曾我先生の「唯識観の契機」に感銘した御縁によるものである。